

食物と人格

どんな場所にいる人間もすべての人が一つの種に属しています。にもかかわらず、人間は人間を嫌い、一つの宗教が別の宗教に敵対し、一つの人種が別の人種より優越感を抱き、一つの国が別の国との接触を避けています。このような闘争はどのようにして生じるのでしょうか？ この問いを深く掘り下げると、答えは明確になります。

宇宙に存在するすべてのものは、五つの財産をもっています。最初の三つはサット・チット・アーナンダ（絶対存在・純粹意識・至福）です。残りの二つはルーパとナーマ（形と名前）であり、これらは一時だけ与えられるものです。この二つは変化を被りますが、最初の三つ、絶対存在、純粹意識、至福は、本来固有の変わらない特性です。ヴェーダーンタの言葉を借りて言えば、この三つは、アスティ、バーティ、プリヤ（存在、光輝あるいは表出、愛情を抱くこと）と名づけられています。これらは神のあらゆる顕現に固の性質です。三つの最終にあるのがアーナンダ（神の至福）です。すべての人間は、アーナンダの一つの具現であり、宝庫であり、乗り物です。

アーナンダ（至福）を認識することが、人間の目標であり、人生の完成です。けれども、人間は、感覚を通して対象物から喜びと幸福を追い求め、獲得すべき最高のアーナンダではなく、低俗で物質的なアーナンダを得ています。外界を通じて、あるいは、内的手段を通じて得られるアーナンダは、ブラフマン（至高の存在）との融合が授けてくれるアーナンダの、断片的な表れにすぎないと言わざるを得ません。私たちは、お湯について話しますが、熱さは水の性質ではなく、火が水に与えたものです。それと同じように、外的なアーナンダや内的なアーナンダは、ブラフマーナンダ（至高なる神の至福）の恩寵を通してそのように授けられます。

食物は感情や激情を抑え高ぶらせる

人間は自分の努力でアーナンダを得たと自慢します。小麦粉をこねた玉を甘いラッドゥー（インドのお菓子）に変えるのは、砂糖です。すべての存在の基盤である恩寵こそが、甘さすなわちアーナンダを与えてくれるのです。星は自分たちが暗い世界に光を照らしていることに自惚れていますが、明るい月光は星の光を気づくことができないくらいほのかにします。月の自惚れも同じです。太陽が空を照らすとき、月の自惚れは挫かれます。ブラフマーナンダは太陽です。これは、星の光や月の光、すなわち、ヴィシャヤーナンダやヴィッディヤーナンダ——自然から得られるアーナンダと霊的な経験に基づく知識から得られるアーナンダ——は無視すべきであるということではありません。これらは踏み段であり、段階であり、見本です。それらをそういうものとして評価している間も、ブラフマーナンダという目標を容赦なく追求しなければなりません。

では、人間はどうしたらその意識、そのアーナンダを得ることができるのでしょうか？ どんなサーダナ（霊性修行）を用いるべきなのでしょうか？ 人はだれもが等しく出生と人生と死から逃れられないにもかかわらず、人はだれもが一つの種類であるにもかかわらず、なぜ人は、憎しみや争いによって、万人の有する権利であるアーナンダがこっそり逃げていくのを許しているのでしょうか？ 悪魔はなぜ人間に内在する神よりも優位に立っているのでしょうか？ その答えは、長いこと人間を惑わせています。

よろしい！ その原因はアハム（自我）です。狭い限られた自己、自我が、災いの原因です。この問題をもう少し深く調べるために、私は、味わう食物の性質が主な原因であると言いましょ。食物には、サットウィック、ラジャスウィック、タマスウィックという三つの性質（純粋さ、激情、不活性に導くもの）があります。人々の中には、サットウィック・ラジャスウィック、あるいは、タマスウィック・ラジャスウィックな食物を食べる人や、良くも悪くも一つの種類から別の種類へ変える人もいます。食物は、感情や激情を軽減したり、抑えたり高ぶらせたりするために、人の振る舞いや行いや態度を形作ります。

サーダカは食べる食べ物に気をつけるべし

同じ両親から生まれたラーヴァナとヴィビーシャナという二人の兄弟は、正反対の性質を備えていました。それは食べて育った食物が異なっていたからです。ラーヴァナがラジャスウィックな食べ物を好んで食べたのに対し、ヴィビーシャナはサットウィックな食べ物に固執しました。同じ性質の食物を好んでいなければ、仲間意識をもつことは困難です。二人がラジャスウィックな食べ物で生き、同じ性質を備えたとしても、友情は長続きしません。嫉妬と憎しみがすぐに二人の絆を壊してしまうでしょう。サットウィックな性質は、こうした悪から人を逃れさせて人の心（マインド、マナス）を浄化し、神への旅のための準備を整えます。というのも、神はサットワ（純粋）であるからです。

多くの人が、次第にサットウィックな性質から、自我が優位を占めるラジャスウィックな性質に陥っていきます。人々はだんだんと神からも離れていきます。というのも、自我が高慢と自惚れを膨らませている所に神は住むことができないからです。人々は自分が神の手を離れたことに対して他の理由を大げさに言うかも知れませんが、過ちはその人自身の自己にあるのです。

サットウィックな食物とは正確には何でしょう？ 体と心とハートにアーナンダをもたらす食物がサットウィックであり、そのような食物は神聖な生活を維持し、食事を終えたときでさえ人を軽やかに保ちます。サットウィックな人は一日一食で満足します。ラジャスウィックな性質は、酸っぱいか、塩辛いか、刺激の強い熱いものを、ひっきりなしに食べることを要求します。タマスウィックな人は、冷たいもの、古いもの、苦味のあるものを好みます。摂取した食物の粗雑な部分は排泄されます。それほど粗

雑でない部分は筋肉と骨を作ります。霊妙な部分は神経と心を作ります。ですから、サーダカ（霊性修行者）は自分が食べる食べ物の性質にきわめて慎重でなければなりません。

神に近づくために神聖な性質をまといなさい

食物に含まれる刺激は、自分に反対する人、意見を異にする人、自分を失望させる人々に対する、好戦的な感情、攻撃性、復讐心を高めます。そのような人は、サソリや蛇、鋭い剣やのこぎりにも劣ります。神の帰依者であると主張する人々の中にさえ派閥争いが起るのは、悲しいことです。そのような人は、しばしば、神を捨てることによって神を冒瀆しているかのように振る舞います。欲望が生じてかなわなかったとき、警告のために自分の過ちや失敗が目の前に置かれたとき、心をそそられる悪事をやめるよう指示されたとき、彼らは激怒して神から逃げ出します！

人間には二つのタイプがあります。それはアマラス（神聖な人）とアスラス（悪魔のような人）です。ラジャシックな人はアスラスです。ギターは、第一番目のサーダナ（霊性修行）として、「アドウェーシュター サルヴァ ボーターナム」（だれ一人として嫌ってはならない）という規律を選択するよう指示しています。神に近づくためには、神聖な性質を身につけなければなりません。一人の同胞を嫌うことが罪であるなら、神を嫌うことは何であると言えるでしょう？ 神の愛に生きなさい——スティティ・マティ・バクティ（安定・個別の心・親交）。信愛は定まった心に生じるものであり、揺れ動く、万華鏡のような心には生じません。アッラーは完全に全託する人にのみ恩寵を注ぎます。いったん完全な全託の態度が強まれば、知覚器官と行動器官の浄化、心と知性と自我意識の昇華は、自然に起こります。私たちが口で食べる物は食物です。私たちはまた、目、耳、鼻、皮膚でも食べています。そうした食物も同じようにサットウィックで浄化されたものであるべきで、刺激的であつたり、よどんでいたり、墮落したものでないようにすべきです。

サイババ述

1983年7月25日

プラシャーンティ ニラヤムにて

Sathya Sai Speaks Vol.16 C19

『プラサード 第二版 食物に関する御言葉集』より